再美日本の道具

再美日本の教材

書写を学ぶ子供たちのために

再美日本の道具づくりは、子供たちが学校で使う毛筆の考案から始まりました。道具箱に収められた一般的な毛筆でも、毎回のお手入れさえすれば長持ちしますが、何より「はねる、はらう、とめる、ぬく」といった基本的な動きが無理なく簡単にできるように、これまでよりも扱いやすい大きさで、弾力性と耐久性のあるものを開発しました。

その第１号は、「はなまるくん」です。これは大人の方にも人気があり、半紙で漢字を学ぶときにご愛用いただいております。その後、文字の大きさや書き方に合わせて種類を増やし、再美日本の道具づくりは、毛筆をはじめ、硯や文鎮、下敷きに半紙、もちろん墨や墨液、そして教材に至るまで、幅広い年齢層の様々な用途に合わせたものづくりをしています。

なかでも下敷きは、半紙用から大きな半切用まで、文字の配置や大きさといった収まり具合を初心者の方にもわかりやすく学べるように工夫しています。子供の頃から半紙いっぱいに大きく書く方が多いのですが、文字には縦長や横長といった固有の表情がありますので、本来の形を正確に学べるように、このような学習のお手伝いも提案し続けています。

さて、子供たちが毛筆で文字を楽しく学べるように、「はなまるくん」の性能を引き継いで、お求めやすさにも工夫したのが「ふでまるくん」です。学校の書写は、子供たちが正しい日本語を学ぶ国語の一分野として、文字の正しさと向き合う時間です。是非とも子供たちに、再美日本の道具を持たせてほしいと願っております。

宇都宮大学教授　地域デザイン科学部
文化マネジメント研究室　中 島 宗 晧

保護者のみなさまへ

子供らしさで閉じこめてはなりません

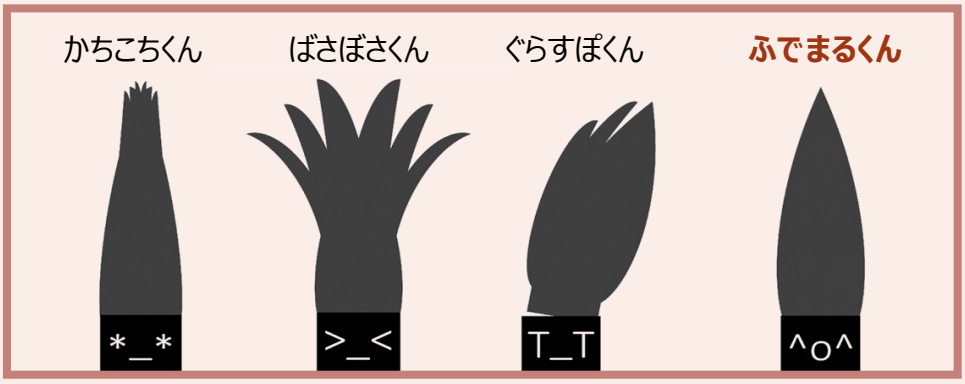
文字は正しく明瞭であることが大切です。文字には人それぞれの個性（くせ）が出ますので、できるだけ早い時期から基本を理解しておく必要があります。その個性が、やがて美しく開花すれば良いのですが、基本のない稚拙な個性は、大人になればたちまち欠点になってしまいます。文字の美しさは正しさなのです。そして、子供らしさとは、いつも懸命に何かに挑む姿を言うのです。

なぜ書写の時間に毛筆を使って学ぶのか

文字の歴史は毛筆によって発展しましたので、文字の形（骨格）や「はね・はらい」といった毛筆によって生じた部分、それに書くリズムを毛筆によって確かめ、理解する必要があります。小・中学校の書写の時間に、毛筆を使って学ぶ理由はここにあります。また、お手本そっくりに書くことが一番の目標ではなく、文字の「正しさ」と向き合い、子供たちの頭の中に正確な形を植え付けることが目標なのです。

道具は、「 道に具（そな）えるもの 」です

体育の時間に空気の抜けたボールは使いません。ところが、書写を学んでいる子供たちの中には、穂先の割れたもの、墨で固まったものを使っていることが多く、また本来は、短めの筆を使ってほしいのですが、扱いにくい穂先の長い筆が道具セットに収められています。それを一部の教科書では、根本までおろさずに使うように指示していますが、水で洗えば根本まですぐにおりてしまいます。再美日本の毛筆は、扱いやすい長さと適度な弾力性が特長ですので、根本までおろしてお使いください。



教育現場の声を形にした再美日本の道具

学校で学ぶ「国語科　書写」と「芸術科　書道」は、日本の伝統文化を学ぶ数少ない教科です。それぞれの目的と意義を再考し、さらに生涯において書を学ぶすべての方のために、再美日本の用具・用材の開発を進めています。「日本の美に気づき、日本の心を築く。」再美日本で開発する道具は、初学者から専門家まで、書写や書道を学ぶすべての方に「使える道具」を提案し続けています。

「はねる、はらう、とめる、ぬく」という書道の基本的な動きが簡単にできます。

半紙一～六字、ひらがな、漢字楷書に目標を定め、穂首に適当な弾力と、穂先のまとまりさらに腰を強くし、従来からの筆サイズにとらわれず書きやすい大きさに仕上げました。

futatabi nippon

お習字をあきらめた大人の方に

もう一度はじめから毛筆で学んでみませんか？

もしもそのお気持ちがあるようでしたら、はじめに道具となる毛筆の扱い方から振り返ってみてください。既にみなさんには、立派に書ける文字があるのですから、それらのすべてを変えようなどと思ってはなりません。ただし、これまでの経験や考え方は、すぐにでも見直してほしいと思います。

たとえば文字を書くときに、毛筆の性能を理解しようとしてこられたでしょうか。何度も書けば毛筆の扱いにも少しは慣れて、お手本の文字に近づけることは出来たと思います。文字の形は筆づかいによって変わるものですから、歴史的にも文字の個性や特長は、筆づかいの結果ともいえるのです。ですから、これまでお使いの毛筆が、とても扱いにくいものであったとすれば、むしろ技巧的な操作を習得されたことになりますので、どちらかといえば個性的なくせのある「書き方」になっていたのかも知れません。

また、よく「上手な字」と「良い字」は異なるかのように言われますが、およそ読みやすく整ったものを「上手」とし、書き手のお人柄が伝わってくるようなものを「良い」と区別しておきます。もっとも、これは文字を見る人の印象ですから、みなさんには「上手な字」や「良い字」ではなく、「正しい文字」を目標にしてほしいと思います。

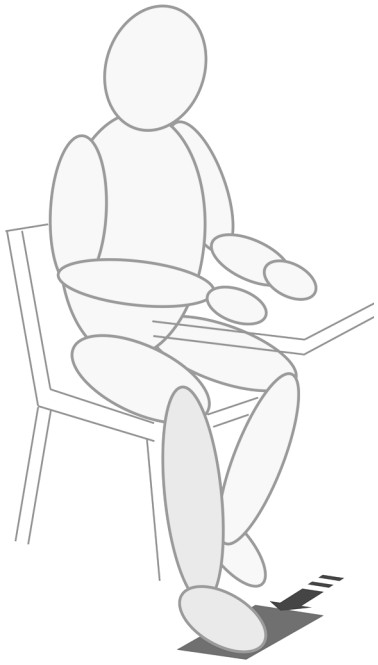
さて、毛筆に限らず文字を書くときに、頭の中で最初に浮かぶ文字の形は正確でなければなりません。この無意識のうちに浮かぶ文字の「正しさ」こそ、伝統的にも毛筆で学ぶべき理由があるのです。学校で学んでこられた「正しさ」をもう一度振り返り、書き手の心持ちを明瞭な形で表してくる毛筆と向き合う時間をおつくりになってはいかがでしょうか。

墨美

「はねる、はらう、とめる、ぬく」という基本的な動きが、無理なく自然に表現できます。そのため、穂首には適当な弾力を持たせ、穂先のまとまりをよくしました。さらに腰を強くし、毛筆本来の長所を前面に押し出しといえます。半紙に四～六文字、楷書・行書に向きます。

futatabi nippon

そこで、みなさまに、少しだけ試してほしいことがあります。

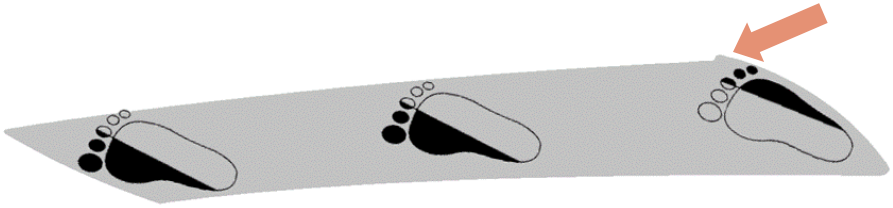


机の上に硯や筆といった道具を広げる必要はありません。「手習い」ならぬ、「目習い」で、文字の正しさと正しい書き方をよく観察してほしいと思います。

はじめに、みなさんには利き手ならぬ利き足を用意してもらいます。もちろん靴を履いたままでもよいのですが、必ず椅子に座って試してほしいと思います。足の膝（ひざ）から下を一本の毛筆に見立てて試してください。

ステップ1．漢字の「一」、横画を書いてみる。

図①　　（ 毛筆なら穂先の跡が残ります。）



上図①をイメージして、漢字の「一」を足で書いてみます。

右図②のように、**つま先**を左に倒したまま右へ移動させてください。
実際に足を動かす長さは、15センチから20センチ程度で結構です。
図①をイメージしながら、足に負担のない範囲で動かしてください。

図②　15 ～20cm

〇ここでは、毛筆を紙面にそっと置いた状態を「足の形」で解説しています。常に足の傾き（角度）を保つために、**かかと**には力をかけないように、軽く地面（紙面）に乗せてください。

〇このような横画、「一」では、書き始め（始筆）から書き終わり（終筆）にさしかかる間（送筆）まで、どちらかと言えば左半分に軽く力をかけます。なお、足の図では力のかかる部分を黒くしました。

〇書き始め（始筆）は、つま先から地面に足をそっと置きます。そして、**かかと**は地面から浮かない程度に置いて、**つま先**（親指）を地面に対して軽く突き刺すように構えます。

〇次に、力をかけた**つま先**に意識を持ちながら、必ずゆっくり右へ動かしてください。**つま先**に力をかけていますが、**かかと**から足の角度が左右にぶれることのないように注意してください。

〇このように、毛筆では穂先（つま先）の傾き（角度）を保ったまま右へと移動しますが、書き終わり（終筆）には足の右半分に軽く力をかけます。また、地面から足を離すときは、**かかと**からゆっくり親指に向かって持ち上げます。そして、最後に地面（紙面）から離れるのは**つま先**（穂先）になります。

◆毛筆で書く場合、書き終わり（終筆）の形を塗るように整えたり、穂先を左にはねるように戻したりする方がいらっしゃいますが、穂先の角度さえ保つことができれば、最後は紙面に向けて穂先を突き刺すように起こせば終筆が整います。また、そのようにすれば、穂先がおよそ書く前の状態に戻り、そのまま次の点画へと移ることができます。なお、終筆の右上（図①の赤い矢印）に少し穂先が出ることになりますが、これは正しい筆づかいの証拠といえます。

◆毛筆では、常に穂先（つま先）に意識を持つために、紙面に対して穂先を軽く突き刺すように扱いますが、これを昔から「腰を立てる」と言います。毛筆は穂先を安定させて、弾力性（抵抗）を持たせて扱うものですから、押さえ過ぎず、また引き上げ過ぎず、むしろ先に毛筆の方から自然に動いてくれるような力の加減が必要となるのです。また、このように穂先への意識を保つことができれば、それぞれの点画の中で、穂先がどこを通っているかを確かめながら学ぶこともできるようになりますので、是非とも実践してほしいと思います。

図③は、ここで目標にしていただきたい動き（形）です。

ここで、**つま先**を傾ける角度（始筆）は40度から45度を理想としていますが、実際に**つま先**をそこまで倒すことはできません。おそらく足でお試しいただく場合は、およそ60から80度くらいになるかと思いますが、ここでは毛筆の動きのみイメージしてほしいと思います。**つま先**（毛筆では穂先）を無理のない範囲で、最後まで同じ角度に保ちながら動かして、横画、「一」を書くイメージトレーニングをしていただきたいと思います。

図④と図⑤は良くない動き（形）です。

最初に傾けた足の角度を最後まで保つようにしてください。

図④は、右へ動かすうちに、**かかと**に余分な力がかかり、**つま先**が左へ倒れてしまったため、後半の幅が狭くなった例です。

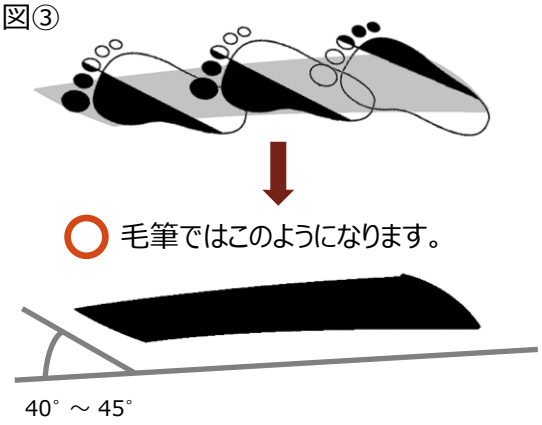
図⑤は、右へ動かすうちに、**つま先**に余分な力がかかり、**つま先**が上を向いてしまったため、後半の幅が広くなった例です。

図⑥では、最初から**つま先**が上に向かって立っています。足で試していただいておりますので、実際にはこのような角度でお試しいただいていますが、ここでは、実際に毛筆を扱うときの力のかけ方や、穂先の方向（角度）について考えてほしいと思います。最初に傾けた足の角度を最後まで保つようにすることで、その結果としての形がどのようになるかを確かめてください。

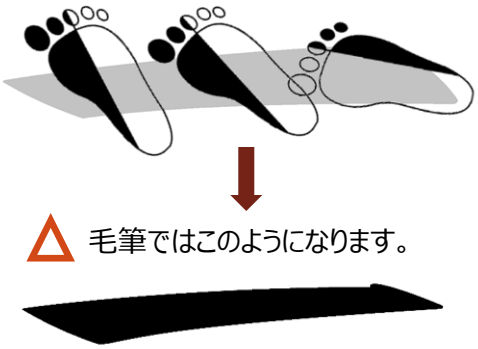
たとえば、お座りの椅子ごと左へ傾け、それまでと同じ位置で試してみてください。それを毛筆の場合で解説しますと、手首の位置はそのままに、肘だけ前へ押し出します。そうすれば、穂先（つま先）を左へ傾けることができます。

図③のように書き始めの角度と書き終わりの角度が揃うように、足の**つま先**（穂先）から**かかと**の左側面に力をかけます。また、どちらかといえば、**かかと**より**つま先**の方に力をかけるのですが、**つま先**の角度（毛筆ではおよそ40から45度）を保つうえで、**つま先**は支点になりますので、**かかと**から左右にぶれないようにしてください。このように**つま先**（穂先）に一定の力をかけ続けるために、毛筆では「腰を立てる」必要があります。また、楷書体に限らず、毛筆で文字を書く場合は、常に押さえ過ぎず、また引き上げ過ぎない扱い方をします。このような「抑揚」を理解してこそ、やがて毛筆を道具として思いのまま扱えるようにうになるのです。

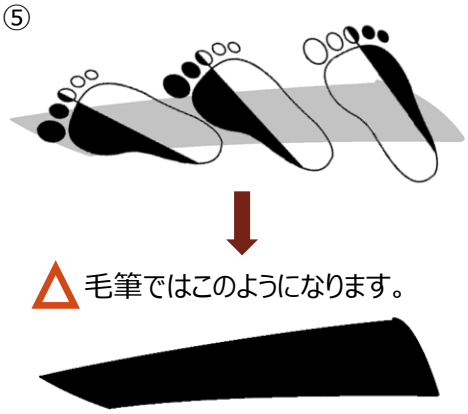
図③



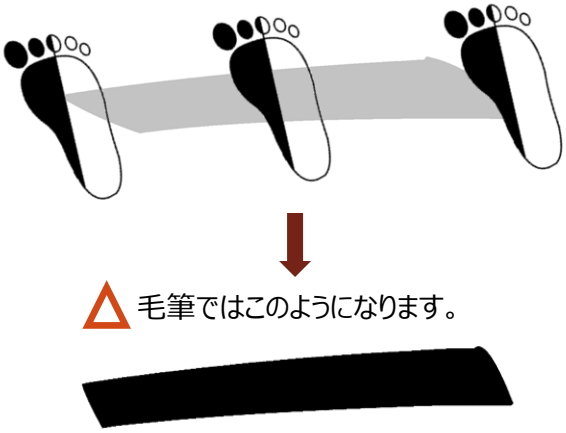
図④



図⑤



図⑥



ステップ2．いろいろと表情を変えてみる。（応用編）

漢字の「三」で、それぞれ表情の異なる横画を確かめてみましょう。

右図⑦をご覧ください。それぞれの横画が異なる特徴を持っていますので、それをよく観察してほしいと思います。

○一画目はお皿のようにすくい上げる意識が入ればいいでしょう。

○二画目は「一」で試した横画です。

○三画目は山なりにするのですが、右へ動かすときに、**つま先**を徐々に左へ寝かせ、中央手前あたりからもとの角度に戻し、少し力を加えながら、終筆までの幅を広くします。

◇漢字の「三」　３画目

◆文字は全体にゆるやかな右上がりです。横画を書くときは、水平や右下がりにならないように注意してください。

◆また、毛筆の運び方にも注目してください。それぞれの点画を書く前に、どの方向から毛筆を運べばよいか、穂先を紙面に置くまでの毛筆の運び方について、図⑦の 矢印 で確認してください。どの文字も、どの点画も、同じ運び方（構え方）ではなく、それぞれ点画の形や傾きを確認してから、穂先を紙面に置くまでの動きにも注意してください。

○角度を戻すタイミングを変えると次のようになります。

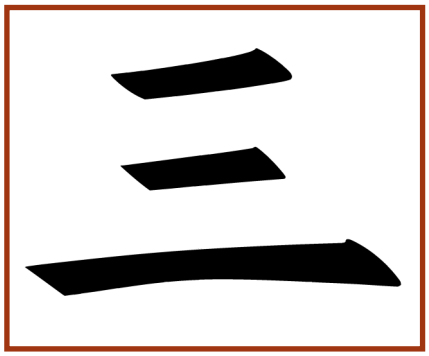
図⑧は、角度を元に戻すタイミングが早い場合

図⑨は、角度を元に戻すタイミングが遅い場合

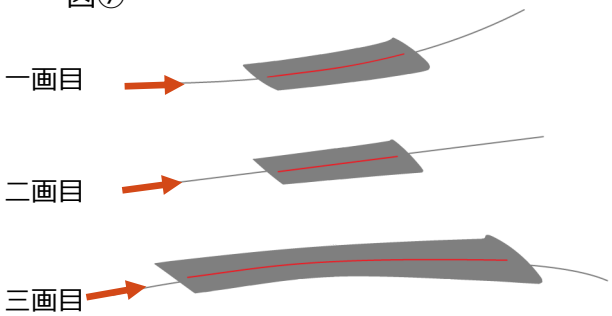
○もっとも、このように穂先の角度を操ることで、様々な表情を表現することができるということです。また、漢字の「三」に限らず、「春」や「青」にも三本の横画が並びます。それぞれ上下の間隔は「三」に比べて狭くなりますが、書き方（方向）としては同じです。

○また、図⑩のように、２画目の位置が下がりますと、文字の表情もうつむき加減になってしまいます。漢字を構成する一点一画をおろそかにせず、表情よく書くためには、点画の配置や傾きにも目配りが必要になります。

◆漢字の「一」など横画を書くリズムは、「そっと置いて（入筆）⇒起こして（始筆）⇒右へゆっくり引いて（送筆）⇒さらに起こす（終筆）」です。かつては三過節といって、図⑪のように、「 トン・スー・トン 」と表現するに相応しい形をしていましたので、「書き方」もそのようにしていました。現在は、かつてのように「トン」と置くのではなく、必ずそっと置いてください。



図⑦

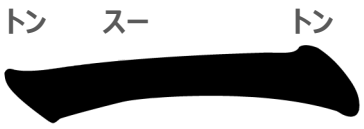


図⑧

図⑨

図⑩

図⑪



現在

さて、いかがでしょうか。少しでもイメージトレーニングになりましたら幸いです。これを実際に毛筆で書くときには、今度は毛筆を足に見立ててほしいのです。みなさまには椅子に座って試していただきましたが、そこで気づいていただきたいことは、毛筆は紙面に対して垂直に立ててばかりではいけないということです。椅子の位置や角度を変えるように、肘（ひじ）を前後左右に構えてみたり、毛筆を持つ位置を変えてみたり、いろいろと工夫してほしいと思います。たとえば、書き始め（始筆）で穂先がどうしても上向きになるなら、筆管（軸）を親指で手前（左）へねじれば、穂先の向きは左へ傾いてくれるのです。

ところで、文字の歴史は書き方の歴史でもあるのですが、そのほとんどが細く小さな毛筆（小筆）で、しかも実用的なサイズ（細字）で書かれてきたのです。ですから、本来の「書き方」というのは、毛筆を手のひらの下で、多少なりともいろいろな角度に倒して使われてきたため、それを大きな毛筆に持ち変えたとしても、紙面に垂直に構え続けたり、技巧的な書き方をする必要はなく、細く小さな毛筆の動きを「再現」することでよいのです。また、そうすることによって、毛筆本来の性能を活かすことができ、現代のわたしたちでも納得できる「書き方」を学ぶことができるのです。

道具とは、「道に具（そな）**えるもの」です。**

再美日本では、このような楷書の「書き方」をいろいろと試していただける教材、『書き方讀本』を2017年春に刊行する予定です。再美日本の道具づくりは、道具本来の性能を備えている以上に、扱いやすさに工夫を凝らしておりますが、道具を扱うと同時に、道具そのものの「あれこれ」を確かめてゆく必要もあります。再美日本では、そのような「気づき」を大切に、初学者から専門家まで、書写や書道を学ぶすべての方に「ご納得いただける製品」を提案し続けています。

『書き方讀本』は2020年5月現在、内容を精査し販売に向けて準備をしております。今しばらくお待ちいただけますようよろしくお願いします。

『書き方讀本－楷書－』

futatabi nippon